

蘇る編集者エミリィ・ディキンソン

——『自選詩集』としてのファシクル4——

中 井 紀 明

ディキンソン（1830-1886）の詩で重要なのは個々の詩であって、自選詩集が存在しない以上、個々の詩がどのような文脈の中で現れてきているのかなどというのは考慮する必要がない。これが今までのディキンソン研究のほぼ支配的な了解事項だ。R. W. フランクリン編集の『エミリィ・ディキンソン草稿本』が1981年にハーバードから出版され、私たちはディキンソンが残した原稿（40の「ファシクル」〔「分冊」または「束」の意〕と呼ばれるものと15の「セット」と呼ばれるもの）をそのままの順番で写真で読むことができるようになったにも拘らず状況は変わっていない。ディキンソンは書き溜めた詩群の中から清書したものを散逸を恐れて「束」として「保存」したと考える研究者のほうが、40の「分冊」よりなる「詩集」を残したと考える研究者より圧倒的に多い。フランクリン自身が前者である。

私はこれに挑戦したい。詩集をディキンソンはほぼ完成しつつあったという確信を私は持ちつつある。ディキンソンは個別の詩だけではなく、より大きな詩集を作り上げていたと仮定すると、テキストとして蘇えらせなければならぬのは個々の詩だけではなく個々の詩に文脈を与えている詩集である。個々の詩として読むばかりではディキンソンの意図したテキスト群は現

キーワード：信仰，再生，自然，人間，ヨハネの福音書

れてこない。彼女の個々の詩群を自身の文脈に手繰り寄せて論じてきた研究者たちは重大な誤りを犯してきたのではないか。詩人の意図を無視した無責任な批評をしてきたことにならないか。点から線へ、つまり個々の詩から詩集へと格上げされたときのディキンソンのテキスト群を読者反応で作り上げてそして読んでみる必要がある。徐々に姿を現しつつあるように思われる詩集という最終的装いの背後に編集者ディキンソンの確固とした意図を私は感じている。

「ヒギンソン氏に出版を打診して見込み薄だと言われたけれども、私の詩群が出版に値しないとはどうしても思えない。どうか後世の読者の皆さん、私の編集した『詩集』を読んでみてください」などと明記した手紙とかメモとかが発見される可能性はまずないのではないか。自身の詩についての詩人自らの『意図の吐露』というのはそもそもめったにあるものではない。だから彼女の死後ファシクルと呼ばれるようになった詩群がディキンソンが「編集」したのかいなかの「証拠」となるものが発見されることは、ただひとつの可能性を除いてまずないと言わなければならない。その可能性とはファシクル群を詩集と「仮定」して読者は読むことができるということである。自選詩集なのかどうかは自選詩集としてとにかく読んでみることだ。個々の詩として書きためていたものを選択した上にさらに清書までして束ねたからには、そこに何らかの意図があるに違いない。その意図は個々の詩を超えた詩群の連続として読むことによって、さらには思い切って詩集として読むことによって読者は感知できるはずである。文学テキストは文書類の中でももっとも複雑な修辭的な意図群をテキストの中にいかに「織り込む」かに絶えず苦慮している言語活動であり、テキストだ。「束」か「詩集」かについての彼女の「神託」など期待できないのだから、論争に決着をつけるために読みを活性化してファシクルを詩集として体験してみるべきだ。作者の意図は読者のテキスト体験の中にしか現れないから、読者反応を頼りにテキストを遡っていったそれらを復元することは可能である。作者と読者は作品を通して交流している。

アメリカの研究者を中心に、例えば1, 2, 8, 16, 18, 20, 21, 24, 28, 37, 40といったファシクル群に編者ディキンソンの意図性が見られるという指摘が散発的になされてきているが、私たちは次のような仮説を立てることができるのではないか。40のファシクル群は後世の読者に向けて密かに「出版」された「分冊」詩集群、セットはさらなる分冊詩集への「採択」と「編集」を待つ待機している詩群ではないだろうか。

私が目指しているのは40のファシクル全てについて順番に詩人自信の編集者としての関与についての仮説群を構築していくことである。この仮説群構築作業に集中的に従事するために、他の「読者」群のおびただしい業績をこの間は意図的に無視することにする。他の読者の学識と洞察を無視したために生じる「読み」の過ち・限界については仮説群の総括作業に入ったときに大々的に検討する。他の読者の洞察から学ぶのではなく、ファシクル1からの詩人自身の「文脈の展開」振りに読者が身を任せたらどのようなことになるかを私は「実験」してみたいのである。ファシクル群全てをディキンソンが作り上げた「文脈」を通してのみ読み進んでいこうと私はしているのであるが、この文脈への徹底した依存性が限界のほかに私の読みにどのような成果をもたらすのかは私自身が大変興味を持っているところである。ディキンソンの「文脈」に私が通曉したがために、同じ「文脈」の存在さえ知らなかったこの一世紀に亘るディキンソン研究が私にどう見えてくるかということも興味深いことである。詩人の文脈は読者の解釈に制限を与えるのか。それとも詩人の文脈を無視したほうが優れた詩人研究をもたらすのか。

上述した仮説を検証するために各ファシクルに何らかの「まとめり」があるかどうかをまず考えるべきである。まずはファシクル1から順に「読んでいく」必要がある。ここで特に留意しなければならないことは「読み」を「空回り」させないようにすることである。誰が読んでいるのか分からないような読みをしないようにしなければならない。「理論」の威を借りてテキストを跡形もなく均してしまうことのないようにしなければならない。大切なのは理論の切れ味を確認することではなく、テキストと「私」という読者を出

会わせ、その「私」の中の動きを観察することである。ディキンソンは自身で「詩集」を本格的に編集して、後世の読者のためにそれを残していたとするなら、その「詩集」全体を一冊の詩集として真摯に読む一人の読者、ディキンソンの残した詩群に「詩集」という深み・奥行きを探る読者を一連のファシクル研究で私は彼女に捧げようと思う。私はこのプロジェクトでスタンリー・フィッシュの提唱した「読者反応批評」を実践する。読者反応批評というのは作品から読者の受ける反応に基づいて作者の意図を逆算しようとする試みだ。これを実践する読者は何よりも作品をテキスト化する読みを実践する。この中でテキスト体験の中にのみ現れる作者の意図に出合うことになる。読者反応批評は作者を重視し、作者の死などということは決して言わない。

最初のファシクル1が何らかの意味でまとまっているか検討していて、各ファシクルを順番に論じて論文にまとめていく必要性に気付いた。論文にまとめようと考え抜くことが、頭の中でファシクル内の詩群を「発酵」させている。書くという行為は考えを促進させるが、書こうとすることで一層「発酵」作用を促進しているようなのだ。一つの詩を読んでいるとふつふつと「意味」が浮き上がってきたり、他の詩とのつながりが自己主張したりする。ファシクルのあちこちで浮き上がってくる意味群が次第にまとまってファシクルの統一的な意味を提示してくる。私がこれから数年かけてしたいことは、テキストを読み・考え・発酵させ・書き上げるという一連の作業を繰り返して、各ファシクルに詩人の編集の跡が覗えるかの検証をはるかなファシクル40まで遂行することである。このプロジェクトの具体的な段取りとしては次のようなものになる。

(1)第一にやることは、各ファシクルを単独で読むとそのファシクル内でどのような意味の展開が見られるか考察することである。何らかのまとまりとか、編集者の存在を窺わせるものがあるかどうか。だからこれからの各ファシクル論の共通の論文名は「蘇る編集者エミリー・ディキンソン」、副題が各ファシクル番号の明示ということになる。共通論文名には時に疑問符がつ

くかもしれない。

(2)次に(1)をやるにはどうしても必要になってくるが、先行するファシクル群の読み体験がどう(1)に影響を与えているか。特定のファシクルのまとまりだけではなく、先行するファシクル群からの継続性、発展性が視え、将来の包括的な全体像把握に役立つだろうかという点も時に考察するかもしれない。

(3)そして、(2)とは逆になるが後ろから振り返ってある特定のファシクルを読み直した時に、以前の読みがどう思えてくるかを考察することも必要になる。各ファシクル論はあくまでも(1)が主であるが、当該のファシクルについて何か新しいことが感知された時には、先行するファシクル(群)にもまったく同じことが言えないかどうか時間をかけて読み返して考えてみる必要がある。ファシクル群は年代順に束ねられているだけだという主張の根拠(どのファシクルも同じようにしか見えない)は特にいつも念頭におく必要がある。これが正しい主張なのか、反論できる主張なのかをいつも考えるべきである。

(4)全てのファシクル群の読み体験を終了して、おぼろげに浮かび上がってきている全体像が、ファシクル論40篇を書き終えて新たにファシクル1から読み直した時にさらにどう変化していくか。徐々に固まってくる全体像は編集者ディキンソンの構想したものであると断定できるかどうかを(4)の作業で最終的な判断をするが、また時には(1)(2)(3)の作業を繰り返すことになるかもしれない。

本稿はこのプロジェクトの一環をなすものだが、ファシクル4について(1)の作業を行った結果、ファシクル4も、ファシクル1から3までと同様、堂々たる詩集であると私は結論付けたい。

先行する三ファシクルについては最近私の考えを公にしている。ファシクル1では「自然における死」と人間の「死」の対比がまず行われたと私は総括した。次にファシクル2の24の詩とファシクル1の詩群を発酵状態に持っていくと、ファシクル1からファシクル2への自然なつながり・継続とファシクル2の鮮やかなまとまりが浮かび上がってくる。ファシクル1の問題意

識を継続し、それに重ね合わせ・深化・展開するように、執拗な考察がファシクル2で繰り広げられている。ファシクル1における自然と人間の対比に続けて、ファシクル2では自然が背後に退き、人間が前面に出てきている。「死」、「死」をもたらす「時」、そしていつの日にか必ず死ななければならないという人間の「運命」に対する恐れ・不安、そしてそれらを和らげるために人間が作り出した宗教・信仰、そして信仰に踏み切れない詩人自身といった大きな主題群が、自然を詩の中に抱えて、あるいは自然を扱った詩群が息抜き・緩衝材として散りばめられる文脈の中で、提出される。ファシクル1で詠嘆をこめて語られた気楽な(easy)自然に対比して、ファシクル2では複雑な人間存在が語られているのである。ファシクル3では多くの語が意図的に繰り返されてこのファシクルにまとまりを与えている。「死」が偏在するこのファシクルに花々が頻出して安らぎと慰めを与えている。「日」が「昨日」へと「死」んでいき「年」が「昇天」していくが、このファシクルで1, 2, 3のファシクル群を通して初めて大きく扱われるのは「人間の死」である。11番, 17番, 18番そしてクライマックスとして23番の詩が並べられている。詩人と編者は「死」を「克服」するのではなく、「やり過ごす」ことを狙っているようである。

ファシクル4は語り手の心の中での葛藤の流れをヨハネの福音書を借景に16の詩群で鮮やかに描き出している。(各詩に言及するときには①などと表記する。)①から⑦までの前半部では一見して春の自然の再生をめつつ(①と③)、その華やかさとは裏腹にそれに対比させられる人間存在の厳然たる現実が指摘される(②, ③, ④, ⑤, ⑥, ⑦)。⑧はこのファシクルの「論」の展開上の転換点である。自然の再生振りが具体的に総括され最後にこのファシクルの隠された真の関心事が自然ではなく「ニコデモの神秘」を通した人間の再生であることが提示される。⑨から⑬までの後半部では背後で自然の再生振りが楽しげに展開されていく中で(⑩, ⑪, ⑬)死と人間再生が論じられ、そしてイエスに要求される彼への無条件の「信仰」をなかなか持ち得ないがために人間再生への疑念が拡がる。イエスによると人間の蘇りの条

件は神の子としてのイエスを信ずることだ。イエスを「信ずる者」は飢えない、喉の渇きがない〔六章35節〕、そして「永遠の生を得る」〔六章47節〕とある。ところがこの語り手はこの「信仰」をしっかりと保持することができない。

語り手は「自然の恒常的な春の再生に比べて人間の再生はきわめて困難ではないか」と懸念している。語り手が呼応できないヨハネの「福音」が語り手に重々しくのしかかってくる。ヨハネが語るイエスが行った奇跡の数々を自身の目で確認しなければイエスを神の子として信ずることはあれこれ考え込むこの語り手には難しい。人は見ないで信じなければならぬのか。「見ないのに信じるものは幸い」(二十章29節)だが、見られなかったから信じられない語り手は「幸い」ではないのか。信仰が確固としている「選ばれた弟子」としてイエスに接することなど語り手にはできそうにもない。語り手は十二使徒に追加されるために(囑望されて)「選ばれる」資格などはないと感じ、心がなく資格も要らない雛菊に身を簞す(12)。(9), (13), (15), (16)亡くなった心を持たない鳥や羊、信仰を持たない死者たちは春になっても墓に捨て置かれ、春に亡くなった一人の例外的な婦人だけが、たぶん確固とした信仰のゆえだろうか、瞬く間に天に召されてしまったことを語る。神は死んだものを区別し、イエスへの信仰を有する者を最良するのだろうか。彼女は地上ではなく、天で再生したのだろうか。この「現実」を我々は認めざるを得ないのか。人間の再生、その鍵を握る「信仰」への懐疑と信仰を持てないのではないのかという「語り手の」自信の無さがじょじょにファシクル内に出てくる。死に取り憑かれた寄る辺の無い人間として運命に翻弄されながら語り手は悶々と生きていかざるを得ないのか。

ディキンソンは「論争的展開」と私が呼ぶことに従事してきている。ファシクルの中で個々の詩は独立した「語り」を展開しているのだが、同時に「論争的展開」の中でファシクル全体を流れていく「より大きな語り」(人間再生の困難さ)の一翼も担っている。「私(イエス)は蘇りであり、命である。私を信ずる者は死んでも生きる。生きていて私を信ずる者はだれでも決して

死ぬことはない」〔十一章25節〕というヨハネの福音に読者の注意を詩人は向けている。詩人はこの福音にいたく心を動かされているが、これに呼応することができない。花が春に再生するのを見るにつけ彼女が思うのは人間の蘇りである。神の子としてのイエスへの信仰を彼女は保持することができない。このファシクルを読み進んでいくにしたがって読者が辿るのは自然の再生、イエスへのじょじょに明らかになってくる不安定な「信仰」そして彼女の人間の蘇りは難しいのではないかという懸念といった主題に拘る流れである。

以下で個々の詩がより大きな「論争的展開」にどう貢献しているかを追っていく。冒頭の数字群は最初の①の数字がファシクル内の順番、真ん中の数字はジョンソン版『全集』（Johnson, Thomas H, ed. *The Poems of Emily Dickinson*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1955）、最後の（ ）内の数字はフランクリン版『全集』（Franklin, R.W, ed. *The Poems of Emily Dickinson*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1998）の番号である。本稿でファシクル4の詩群として提示したディキンソンの16篇について記しておかなければならない。すでに述べたようにディキンソンの40「ファシクル」全てと「セット」の原稿は『エミリー・ディキンソン草稿本』（Franklin, R.W, ed. *The Manuscript Books of Emily Dickinson*, Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press, 1980）に写真版で出ているのだが、彼女のこの原稿群が彼女の指示通りにまとめられて「活字で印刷」されたことはなかった。ファシクルとセットの全ての詩は年代順に並べられたフランクリン版『全集』の該当の詩群の一バージョンとして収録されているが、本稿のように順番に並べられていないために詩集として読もうとするときには大変不便である。ディキンソンの自選詩集は依然として「出版」されていないと言わざるを得ない。本稿のようにディキンソンの意図した順番で提示することには詩集として始めて「出版」することになるという重要な意義がある。収録した詩群はまず Paul P. Reuben Website（<http://www.csustan.edu/>

english/reuben/home.htm#top)からジョンソン版『全集』に基いたディキンソンの電子版全詩集に入り、該当する詩群をファシクルごとに取り込み、それを逐一フランクリン版『全集』の中の該当の詩群のファシクル「版」詩群で「校正」「上書き」したものに過ぎない。フランクリン版『全集』の中のファシクル「版」詩群を全て『エミリー・ディキンソン草稿本』で逐一検討してフランクリンの読み解きが正確か判断したわけではない。将来的には彼の本文校訂にも時に異議を唱えることもあるかもしれないが、当面はフランクリンの本分校訂に全面的に依存することにする。今のところ餅は餅屋に任せたい。

テクスチュアル・クリティシズムには2種類あって、一方はフランクリンのような専門の学者が行い「作品」を生み出し、もう一方では読者が「テキスト」を生み出す。「作品」を読むことによって読者は「テキスト」を構成し、「作品」を「テキスト」に蘇えらせていく。「作品」の意図は読者のこの読み体験の中にしか現れない。「作品」は物であり静止しているが、「テキスト」は読者の中で動いている。「学者」が行う「本文校訂」としてのテクスチュアル・クリティシズムは、「読者」が行うテクスチュアル・クリティシズム（「作品分析批評」）に引き継がれる。私がやろうとしていることはフランクリンの本文校訂によって出来上がったディキンソンの点としての作品群を、点を越えた次元（詩集の分冊）での「テキスト」群に変貌させ蘇らせることである。そのために今必要なことは同じテクスチュアル・クリティシズムでも「本文校訂」ではなく、「作品分析批評」であり、特に読者反応批評によって提唱された読みの活性化による「テキストの構成」ということである。テキストとは作品の読みの体験の中に蘇ってくる「作者思いの読者」の創作体験である。（「作者思い」の読者に私になろうとしている一つの動機は、本稿が扱っているファシクル群を「編集集中」の時期の写真とおぼしきものが最近発見されたという次のサイトを見たからである。Philip F. Gura. “How I Met and Dated Emily Dickinson: An Adventure on eBay” <http://www.common-place.org/vol-04/no-02/gura> グラ教授のこのサイトで出会うこと

ができる詩人の写真はディキンソン研究者間では真剣に取り上げられていないが、脂の乗り切った創作意欲旺盛な、たぶんファシクルを編集中の、ディキンソンの盛りの時期のもので、詩人・編集者が華やかに「蘇って」いると私には思える。この写真の発見は詩人・編集者を蘇らせようとするプロジェクトに私を誘い込んでいる一つの要因になっている。) 作品群は譜面だ。読者は共鳴版を持った演奏者だ。この演奏者は他の読者である聴衆に向けて作品から蘇ったテキストを発信する。

Fascicle 4

① 134 (92)

Perhaps you'd like to buy a flower,
But I could never sell —
If you would like to *borrow*,
Until the Daffodil

Unties her yellow Bonnet
Beneath the village door,
Until the Bees, from Clover rows
Their Hock, and sherry, draw,

Why, I will lend until just then,
But not an hour more!

花を「売る」と「貸す」との違いへのこの詩におけるこだわりについてはよく分からないし、このファシクルの冒頭で花への「執着」が語られるということはどのような意味があるのかも分からない。まず花への「私の」執着を読者に共有させようというのだろうか。しかしこのファシクルの

「論争的展開」の中で重要なことは、自然の再生を確信した「語り手」は喜びはしゃいでいるということである。

② 135(93)

Water, is taught by thirst.
Land – by the Oceans passed.
Transport – by throe –
Peace, by it's battles told –
Love, by memorial mold –
Birds, by the snow.

世界には明や喜びだけではなく、暗や悲しみ・苦しみがあり、前者は後者を体験した時がもっとも輝くという逆説がある。これは人間にとっては厳しい現実だ。⑧のニコデモの「神秘」（人間の再生）には再生のための洗礼の水〔三章5節〕、イエスが与えてくれる喉の渇かない水〔四章14節〕が出てくる。冒頭に上げられるのは命の水であるが、不足すれば喉が渇く水だ。愛は相手が亡くなったときに強く感じられるというが、人間にとって死ぬことがこの世に戻れないことだというのはつらい現実だ。

③ 136(94)

Have you got a Brook in your little heart,
Where bashful flowers blow,
And blushing birds go down to drink –
And shadows tremble so –

And nobody knows, so still it flows,
That any brook is there,
And yet your little draught of life

Is daily drunken there –

Why – look out for the little brook in March,
When the rivers overflow,
And the snows come hurrying from the hills,
And the bridges often go –

And *later*, in *August* it may be,
When the meadows parching lie,
Beware, lest this little brook of life,
Some burning noon go dry!

人の心に川や水がある。川辺には花が咲き、鳥が寄ってくる。この詩では①と②の「花」と「水」が共に冒頭でつながれ、これらに「生命」という項が付加される。水は花や鳥などに生命を与えるが、3節・4節となると1節・2節の同じ川が豹変して洪水を起こしたり干上がったたりする可能性も指摘される。③の後半で自然のこのような面に語り手の目がいくのは自然の生への語り手の嫉妬かもしれないが、語り手が諸手を挙げて春の再生を祝う気にならないからでもある。語り手の心に重くのしかかっているのは人間の再生である。人間の再生が自然の再生ほど簡単ではないことを語り手は知っている。

④ 137(95)

Flowers – Well – if anybody
Can the extasy define –
Half a transport – half a trouble –
With which flowers humble men:
Anybody find the fountain
From which floods so contra flow –

I will give him all the Daisies
Which opone the hillside blow.

Too much pathos in their faces
For a simple breast like mine -
Butterflies from St Domingo
Cruising round the purple line -
Have a system of aesthetics -
Far superior to mine.

ここでは花に代表される自然が人間にもたらす「恍惚」（春になるといっせいに自然は再生するという「歓喜」と人間は死んだらそれっきり戻ってきはしないという「困惑」が半々の、人間を惨めにする「恍惚」）が語られている。花の、人間をがっくりさせるこの「二面性」は実は自然と人間の「対比」なのだ。ファシクル全体の「論の展開」の絡みでもうひとつここで述べていただかなければならない点がある。イエスを信ずる者の脇腹（七章38節）の「泉」から流れ出て永遠の命へと上って（四章14節）いく水の話で、この「泉」の発見者を褒美をつけてでも「語り手」は見つけ出したがっている。十二使徒の一人トマスと同じく「語り手」は、「見なければ信じられない者」（二十章29節）（ここでは「見た」者の話を聞かなければ信じられない者）だ。「語り手」は肉体の目で「見る」ことができないが故にイエスを「信仰」することができないでいる。

⑤ 138(96)

Pigmy seraphs - gone astray -
Velvet people from Vevay -
Belles from some lost summer day -
Bees exclusive Coterie -

Paris could not lay the fold
Belted down with emerald –
Venice could not show a cheek
Of a tint so lustrous meek –
Never such an ambuscade
As of briar and leaf displayed
For my little damask maid –

I had rather wear her grace
Than an Earl's distinguished face –
I had rather dwell like her
Than be "Duke of Exeter" –
Royalty enough for me
To subdue the Bumblebee.

自ら育てたバラに現実の栄華を絡めてみることに抗いがたい楽しみがある。バラの周りの自然に比べれば人間の栄華などたかが知れている。

⑥ 83(88)

Heart not so heavy as mine
Wending late home –
As it passed my window
Whistled itself a tune –

A careless snatch – a ballad –
A Ditty of the street –
Yet to my irritated ear
An anodyne so sweet –

It was as if a Bobolink
Sauntering this way
Carolled and mused, and carolled –
Then bubbled slow away –

It was as if a chirping brook
Opon a toilsome way
Set bleeding feet to minuets
Without the knowing why –

Tomorrow – night will come again –
Perhaps – tired and sore –
Oh Bugle, by the window
I pray you stroll once more!

②から⑤までに人間にとっての厳しい現実を指摘続けてきたからだろうか、語り手は気がふさいでいる。ふと耳に入ってきた通りの歌声が気の重いこの語り手を慰める。

⑦ 139 (89)

Soul, Wilt thou toss again?
By just such a hazard
Hundreds have lost indeed –
But tens have won an all –

Angels' breathless ballot
Lingers to record thee –

Imps in eager Caucus

Raffle for my soul!

ここも⑥に引き続いて人間存在が扱われ、人の気を重くさせる無計画性、偶然性が指摘される。

死という終着点が定められているからだろうか憂鬱さに傾きがちな人間存在が⑥、⑦で指摘されている理由は、このファシクル全体を流れる「論争的展開」(“polemical reasoning”)を考えることで分かる。このファシクルには16の詩が入っていて、それぞれの「語り」を展開しているのであるが、同時に個々の詩はファシクル4全体を流れていく「論の展開」(reasoning)の一翼も担っている。自然の恒常的な春の再生に比べて人間の再生はきわめて困難であるという論がこのファシクルでは展開されていると私は考えるが、⑥、⑦がここに置かれるのはこの論の展開の一段階を編集者ディキンソンが構成させているからである。

⑧ 140(90)

An altered look about the hills -
A Tyrian light the village fills -
A wider sunrise in the morn -
A deeper twilight on the lawn -
A print of a vermilion foot -
A purple finger on the slope -
A flippant fly upon the pane -
A spider at his trade again -
An added strut in Chanticleer -
A flower expected everywhere -
An axe shrill singing in the woods -
Fern odors on untravelled roads -

All this and more I cannot tell –
A furtive look you know as well –
And Nicodemus' Mystery
Receives it's annual reply!

この詩は春の再生の総括であるが、最後の二行で人間の再生の問題が明示される。この詩の最後に到って花とその花に生命を与えている水 (①, ②, ③, ④) がなぜ執拗に出てきたかがいよいよ明らかになる。最後に出てくる「ニコデモの神秘」というのは(人間の)再生のことであるが、自然の春の再生に準用されている。本来はニコデモという人物がイエスから聞き出した、人間が「水と霊によって新たに生まれる」(三章1-8節) ことである。春の自然の再生が述べられつつ、それ以上に人間の再生(resurrection)がこのファシクルの重要な主題としてここで始めて提示される。これ以降の詩ではこの人間の再生が「信仰」を条件にしているので難しくなることが暗示される。

また⑫が同じ『ヨハネ福音書』(15章16節) から「引用」されているのを知り、そしてあらためて『ヨハネ福音書』を読んでもみるとファシクル4は『ヨハネ福音書』を背景に書かれているという驚くべき事実には読者は気付かされる。

⑨ 141 (91)

Some, too fragile for winter winds
The thoughtful grave encloses –
Tenderly tucking them in from frost
Before their feet are cold –

Never the treasures in her nest
The cautious grave exposes,

Building where schoolboy dare not look,
And sportsman is not bold.

This covert have all the children
Early aged, and often cold,
Sparrows, unnoticed by the Father –
Lambs for whom time had not a fold.

春になって再生の喜びに沸いている自然の中で死者たちの再生を改めて見ようとするかのように語り手は墓を覗き込んでいる。冬から墓は死んだものたちを守ったのか。信仰を持つには幼すぎた子供たち、そして心を持たないがゆえに信仰など持ち得ない雀や羊を守っているかのような墓。“unnoticed by the Father” という句に注目すべきだ。信仰告白しない者、信仰に無縁なものは「父なる神」に気付かれないのか。気付かれないということはつまり「父なる神の恩寵によって蘇る」ということはないということか。

⑩ 142 (85)

Whose are the little beds, – I asked
Which in the valleys lie?
Some shook their heads, and others smiled –
And no one made reply.

Perhaps they did not hear – I said,
I will inquire again –
Whose are the beds – the tiny beds
So thick upon the plain?

'Tis Daisy, in the shortest ?

A little further on –
Nearest the door – to wake the *Ist* –
Little Leontodon.

'Tis Iris, Sir, and Aster –
Anemone, and Bell –
Bartsia, in the blanket red,
And chubby Daffodil.

Meanwhile – at many cradles
Her busy foot she plied –
Humming the quaintest lullaby
That ever rocked a child.

Hush! Epigea wakens!
The Crocus stirs her lids –
Rhodora's cheek is crimson –
She's dreaming of the woods!

Then turning from them reverent –
Their bedtime 'tis, she said –
The Bumble bees will wake them
When April woods are red.

春に再生して今は眠っている花の群れ。墓の中で「眠っている」死んだもののたちの眠りとはいかに違うことか。

For every Bird a nest -
Wherefore in timid quest
Some little Wren goes seeking round -

Wherefore when boughs are free,
Households in every tree,
Pilgrim be found?

Perhaps a home too high -
Ah aristocracy!
The little Wren desires -

Perhaps of twig so fine -
Of twine e'en superfine,
Her pride aspires -

The Lark is not ashamed
To build upon the ground
Her modest house -

Yet who of all the throng
Dancing around the sun
Does so rejoice?

季節は春である。nest とか bed とか自然に home を作って生を「享受している」花，鳥。

“They have not chosen me,” – he said –

“But I have chosen them” !

Brave – Broken hearted statement –

Uttered in Bethleem!

I could not have told it,

But since Jesus *dared* –

Sovreign, know a Daisy

Thy dishonor shared!

この詩はこのファシクルの「論争的展開」の上できわめて重要な詩である。イエスは「見込みあり」と認めて12人の弟子たちを「選んだ」(十五章16節)。この「私が選んだんだ」というイエスの発言はユダが裏切ることをすでに見抜いた上(六章70節)での発言である。裏切られたイエスの心情を察すると、「選ばれた」人々の列に「見込みがある」という理由で「私」が加わるのはあまりにも気が重い。イエスの期待している「信仰」がぐらついているから、「私」はとてもイエスの期待に応えられるような者ではない。人間としてよりはいっそう、意識がないのだから信仰のありなしが問われることのない路辺の花(“daisy”)ぐらいに私を捉えてもらったほうが「私」は気が楽である。

13 144(81)

She bore it till the simple veins

Traced azure on her hand –

Till pleading, round her quiet eyes

The purple Crayons stand.

Till Daffodils had come and gone

I cannot tell the sum,

And then she ceased to bear it –
And with the Saints sat down.

No more her patient figure
At twilight soft to meet –
No more her timid bonnet
Upon the village street –

But crowns instead, and courtiers –
And in the midst so fair,
Whose but her shy – immortal face
Of whom we're whispering here?

一人の婦人が死ぬが、墓に留まってはいない。①の水仙はここでも代表的な春の花であるが、この水仙が終わる時になって、「信仰心」が認められたからであろうか、死ぬと同時に忽然として昇天してしまう。彼女は自然と同じようにこの地上で「再生」しはしない。信仰を持つ者が再生するのは天国なのか。人間にとって昇天することが再生・復活することなのか。昇天する者（⑬）と墓場にとどまるもの（⑨、⑮、⑯）は差別化されているのか。信仰のない者は神から無視され墓に留められるのか。

⑭ 81 (82)

We should not mind so small a flower
Except it quiet bring
Our little garden that we lost
Back to the Lawn again.

So spicy her Carnations nod –

So drunken, reel her Bees –
So silver steal a hundred flutes
From out a hundred trees –

That whoso sees this little flower
By faith may clear behold
The Bobolinks around the throne
And Dandelions gold

まず庭に春とともに戻ってきた花の意義について語る。花は自然の再生を証明している。これに比べて人間の再生のなんと難しいことか。「論争的な展開」の中でいまやキーワードになった“faith” (14, 15) という重要語が連続して使われる。

15 145 (83)

This heart that broke so long –
These feet that never flagged –
This faith that watched for star in vain,
Give gently to the dead –

Hound cannot overtake the Hare
That fluttered panting, here,
Nor any schoolboy rob the nest
Tenderness builded there.

昇天せずに墓中に留められている死者たちに信仰に自信がもてない「私」は共感する。信仰に自信を持てない「私」はこの人たちと同じくここにとどまるのか。第一節の後半にキーワードの「信仰」が明確に説明される。救い

主としてのイエスを捜し求めて探せなかったのは「私」だ。

16 146(84)

On such a night, or such a night,
Would anybody care
If such a little figure
Slipped quiet from it's chair,

So quiet – Oh how quiet,
That nobody might know
But that the little figure
Rocked softer – to and fro –

On such a dawn, or such a dawn –
Would anybody sigh
That such a little figure
Too sound asleep did lie

For Chanticleer to wake it –
Or stirring house below –
Or giddy bird in Orchard –
Or early task to do?

There was a little figure plump
For every little knoll,
Busy needles, and spools of thread –
And trudging feet from school –

Playmates, and holidays, and nuts –
And visions vast and small.
Strange that the feet so precious charged
Should reach so small a goal

人間の再生の真価が問われる場である墓場は春が訪れないところ、つまり復活が起こりえない所だ。地上での「再生」の場は野原であり、庭である。この墓の子供たちはこんなに早くこの小さな墓に葬られ、信仰心がないから今後もここに留められるのか。

追記

2004年6月19日に神戸女学院大学JD館大会議室で開かれた日本エミリー・ディキンソン学会第20回全国大会で私は「蘇る編集者ディキンソン—ファシクル4」を発表したが、本稿は、日本エミリー・ディキンソン学会ニューズレター23号に執筆した英文と和文の詳細な「発表要旨」を基に大幅に加筆修正したものである。

ファシクル1から3についてはすでに次の三論文を公刊しているので参照されたい。

「蘇る編集者エミリー・ディキンソン—ファシクル1」『表象と生のはざままで—葛藤する米英文学』2004年7月（南雲堂）、「蘇る編集者ディキンソン—ファシクル2」『教育研究』46（2004年3月）国際基督教大学教育研究所、「蘇る編集者ディキンソン—ファシクル3」『国際文化論集』29（2003年12月）桃山学院大学総合研究所

Emily Dickinson as Conscious Editor of Fascicle 4

Noriaki NAKAI

Emily Dickinson left almost 1800 poems, many of them in bundles later called fascicles; they have been usually regarded as mss of poems chronologically bound just for preservation. Recently in the United States, however, some scholars find unity in fascicles without clarifying why only their particular fascicles have unity under the editor Dickinson. My hypotheses are: Franklin's "fascicles" are in fact distinct collections of Emily Dickinson's poetry, and his "sets" are groups of poems waiting for later inclusion in further fascicles.

My project is to offer the poet a persistent reader taking her fascicles as collections of poems edited by the poet herself and as more than just chronological. My method of reading-thinking-fermenting-writing of/about the fascicles was formed by Stanley Fish's Reader Response Criticism and has been the main engine in my analyses of Fascicles 1~4 and will take me as far as Fascicle 40.

My experiment is to deliberately become me the first reader of her first "published" collection of her poems edited by the poet herself and to intentionally have the recent scholarship on Dickinson's poetry and fascicles stop intruding into my reading. The first reader is supposed to know nothing in terms of interpretations and commentary accumulated later. The only and main source of information on this "publication" is the collection itself, and the tradition of close reading from New Criticism to Reader Response Criticism will help me here.

In Fascicle 1 Dickinson the editor juxtaposes nature and man in terms of time: nature rotates and overcomes time; man proceeds in a forward direction, dies and never returns. Fascicle 2 is not just a bundle of poems but an elaborately edited collection of poems, logically following Fascicle 1.

In Fascicle 2, against the softening background of nature, are presented big themes like time, the human destiny of death, faith in Christ, and lastly the poet's scrupulous feelings about having faith which seem to be rooted in her own life. Although Fascicle 2 is breathlessly and daringly taking up big themes for only the second fascicle in a work of forty, it quite impressively binds these themes and reveals Emily Dickinson as a skillful editor. In Fascicle 3 Dickinson the editor intentionally repeats many words to bind this fascicle. Flowers are so abundant in this fascicle as to give solace to the reader facing the inevitability of dying. Days "die" into lingering yesterdays and a year "went up this evening", but for the first time in the first three fascicles substantial human deaths are treated. I discuss the eleventh, seventeenth, eighteenth, and the climactic twenty-third poem, where, I suggest, the poet and the editor in her are engaged in not so much overcoming as outwitting the human destiny of death.

This is the fourth article in my project of reading each of the forty fascicles as a distinct collection of poems chosen and edited by Dickinson. Literary texts are texts whose rhetorical intentions, deliberately and meticulously interwoven into the text by the author, are traceable through reader responses. Since we cannot expect Dickinson herself to deliver an oracle as to her real intentions in the fascicles, I have sought to experience the text of Fascicle 4 as a reader sensitive to the reading process. My conclusion is that, like the first three fascicles, it is a thematically united collection.

Through the sixteen poems of Fascicle 4, Dickinson vividly depicts the stream of conflicting thoughts in the narrator's mind against the background of the Gospel According to St. John (King James Version). In the former part of the fascicle (poems #1 through #7), the narrator is at the same time pleased at the rebirth of the land in springtime (poems #1 and #3) and made gloomy by the contrast with the stark reality of human existence (poems #2 through #7). In poem #8, the turning point in the reasoning process of the fascicle, the narrator recapitulates her joy at the rebirth of Nature but reveals at the end of the poem that the fascicle's real concern is not with Nature but with human rebirth (3:5). In the

latter part of the fascicle (poems #9 through #16), where death and human resurrection are discussed against the contrasting background of a cheerful description of Nature's rebirth in springtime (poems #10, #11, and #14), we discover the narrator's growing doubt as to the possibility of human resurrection because of the difficulty of maintaining the unconditional "faith" demanded by Jesus. According to Jesus, human resurrection is possible only for those with faith in him as the Son of God: "he that believeth on me shall never thirst" (6:35) and "he that believeth on me hath everlasting life." (6:47)

The narrator, fearing that compared with the annual rebirth of Nature in springtime human resurrection is difficult, finds herself unable to respond to the message of St. John's Gospel, which gradually comes to weigh more and more heavily on her mind. For such a scrupulous narrator, to believe in Jesus as the Son of God without seeing for herself the miracles St. John claims for Him is problematic. Should we believe in things we have not seen? "Blessed *are* they that have not seen, and *yet* have believed" (20:29). If so, then the narrator, who has not seen and therefore cannot believe, is unblessed. She cannot face Jesus because she does not qualify to stand among those disciples chosen for their unshakeable belief in Him. She feels unqualified to be added to those selected for their trustworthiness as the Twelve Disciples, and finally turns herself into a humble daisy devoid of heart and mind and free from all demands (poem #12).

At this point (poems #9, #13, #15, and #16) the narrator uncovers some graves. She learns that many of the dead, either because they are animals without minds or because they are without belief, are left abandoned in their graves even when springtime comes, while an exceptional woman, presumably being possessed of a firm faith, has been raised to Heaven immediately following her death in springtime. It is as if she has been resurrected not on this earth but in Heaven itself. Are we being pressured to accept the reality that God discriminates among the dead and favors those with faith in Jesus? The narrator's skepticism toward the possibility of human resurrection, which takes belief in Jesus as its key, and her

nihilistic fear of being incapable of faith gradually pervade the fascicle. Are we doomed to wander in helpless anguish through this haphazard world, buffeted by Fate, waiting only to die?

In this fascicle Dickinson is engaged in what I call “polemical reasoning”. Each poem is an independent narrative but at the same time is contributing through “polemical reasoning” to the formation of the fascicle’s overall narrative of the difficulty of human resurrection. Dickinson is referring the reader to the words of Jesus in St. John’s Gospel that “I am the resurrection, and the life: he that believeth in me, though he were dead, yet shall he live; and whosoever liveth and believeth in me shall never die”. (11:25) Though enchanted and moved by this Gospel prophesy, the poet finds herself unable to respond to it. In the return of flowers in the springtime she sees human resurrection, yet she cannot hold on to the belief in Jesus as the Son of God. As we read the poems in this fascicle, we follow the theme of rebirth in Nature, which is simultaneously contrasted to the narrator’s fear of the difficulty of human resurrection due to her increasingly shaky belief in Jesus.

We will now trace how the narrative of each of the sixteen individual poems contributes to the fascicle’s overall narrative of “polemical reasoning”. The first line of each poem is shown in parentheses following the poem number.

In **Poem #1** (“Perhaps you’d like to buy a flower,”) the narrator rejoices, confident of Nature’s seasonal rebirth.

In **Poem #2** (“Water, is taught by thirst.”) the narrator lets us know that there are both bright and dark sides to everything on this earth, and that we should admit that we recognize and appreciate things most deeply when we suffer from their lack. At the beginning of the poem we have the “water of life” whose lack leads to thirstiness; we must wait until the Nicodemus Mystery in poem #8 for “water” that does not lead to thirstiness (4:14) and that gives rebirth (3:5). It is said that love is most dearly felt when the loved one dies, but the stark reality is that dying means not returning to dwell on the earth.

In **Poem #3** (“Have you got a Brook in your little heart,”) the flowers

of poem #1 and the water of poem #2 are linked, and a new item, “life” is added. In the first and second stanzas we see how water gives life to flowers and to birds, but the same river, we learn in the third and the fourth stanzas, can also at times flood or dry up. That the narrator seeks to draw our attention to this harsh reality at the end of the poem is perhaps the result of her jealousy toward Nature’s guaranteed annual rebirth, but probably also because she cannot bring herself to celebrate unreservedly the renewal of Nature thanks to her pessimistic view of the possibility of human resurrection.

Poem #4 (“Flowers – Well – if anybody”) provides readers with a puzzling problem of definition. Flowers, as the embodiment of Nature, give us “transport” with their return at their successive springtime, but at the same time “trouble” through the fact that the dead among us can never return. The “extasy” caused in us by this combination of “transport” and “trouble” humbles us. There is one more point that must be mentioned here in connection with the fascicle’s overall narrative of “polemical reasoning.” The narrator wants to find, even at the expense of a reward, someone who could truly claim to be represented by the following words of Jesus: “...but the water that I shall give him shall be in him a well of water springing *up* into everlasting life (my emphasis).” (4:14). Like Thomas the Apostle, she is not one of those “that have not seen, and *yet* have believed” (20:29) Unable to see what Jesus did with her own eyes, she cannot believe in Him.

In Poem #5 (“Pigmy seraphs – gone astray –”) the narrator, looking at the roses she has raised, cannot resist dwelling upon the limited opulence of human affairs: human splendors are nothing compared with the natural world around us.

In Poem #6 (“Heart not so heavy as mine”) the narrator, gloomy thanks probably to the stress on the harsh reality of human existence in poems #2 through #5, receives solace from a song she overhears.

Poem #7 (“Soul, Wilt thou toss again?”) describes another feature of harsh human reality which is dominated by haphazardness and lack of planning.

In **Poem #8** (“An altered look about the hills – ”) the narrator recapitulates her concern with the seasonal rebirth of Nature, while in the last two lines her real concern with human resurrection is made clear. At the end of the poem the reader finally learns why flowers and the water that gives them life appear so repeatedly in poems #1 through #4. We also learn about “Nicodemus’ Mystery” which, though concerned specifically with human resurrection, is here being applied to natural rebirth too. The reference comes from the passage in the Gospel According to St. John: “Except a man be born of water and *of* the Spirit, he cannot enter into the kingdom of God” (3:5). We understand for the first time here that the theme of human resurrection is the main theme of this fascicle over and above that of natural rebirth. In the following poems the possibility of human resurrection is implicitly doubted because of its dependence on unwavering faith in Jesus.

In **Poem #9** (“Some, too fragile for winter winds”) the narrator, after having rejoiced in the springtime rebirth of Nature, is trying to see into some graves to find out whether those buried there are also revived. The graves have protected those within – children, sparrows and lambs – from the winter. The words “unnoticed by the Father” deserve notice. What is happening here to those in the grave who, like the children, are too immature to profess “faith,” or to those who, like the sparrows and lambs, have no mind that would enable them to have faith? Are they unnoticed by the Father simply because they don’t have faith? Does being unnoticed by the Father mean that they must remain in the grave without the possibility of resurrection?

In **Poem #10** (“Whose are the little beds, – I asked”) the narrator is watching the flowers revived in springtime and now enjoying sleep different in kind from that in the graves. .

Poem #11 (“For every Bird a nest – ”) presents, as in poem #10, flowers and birds making homes for themselves and enjoying their lives in springtime.

Poem #12 (“ ‘They have not chosen me,’ he said,”) is a crucial poem in the greater narrative of the fascicle, centering on the story of the Twelve

Disciples. Jesus chooses the twelve for their “trustworthiness” or “promising nature” (15:16). Elsewhere Jesus tells them “I chose you” in the knowledge that one of them, Judas, would betray Him (6:70). Reading Jesus’ thoughts at the moment of betrayal, the narrator is hesitant to be added to the twelve disciples chosen for their “promising” nature. Knowing that her faith is too unstable to live up to Jesus’ expectations, she feels happier to be regarded by Jesus as no more than a roadside daisy, lacking in consciousness and consequently free from the demands of faith.

Poem #13 (“She bore it till the simple veins”) tells of a woman who died at the end of spring. This woman did not stay in the grave but went immediately to Heaven, presumably because her firm belief in Jesus had been recognized. She was resurrected, but not on the earth as flowers are. Are people with faith resurrected only in Heaven? Is going to Heaven the only way to be born again? Is God discriminating between the woman raised to Heaven in this poem and those remaining in their graves in poems #9, #15, and #16? Does lack of faith mean that we must remain in our grave deserted by God?

Poem #14 (“We should not mind so small a flower”) talks about the significance of a flower, symbol of the rebirth of the garden she lost, and the relative difficulty of human resurrection. “Faith”, a keyword crucial to the “polemical reasoning” in this latter part of the fascicle, is repeated in this poem and the next.

In **Poem #15** (“This heart that broke so long?”) the narrator, uncertain of her faith, sympathizes with the dead left deserted in their graves. At the end of the first stanza she explains why this keyword “faith” has become so crucial: she had sought after Jesus as her Savior, but her search had been “in vain.”

In **Poem #16** (“On such a night, or such a night,”) the narrator’s sympathy is with the small children laid so early in their tiny graves. Must they remain there forever because of their lack of faith?